岩波文庫
240

源氏物語参考

平安朝文学研究会編

岩波書店



8081

序

古書は種々の理由からして異本を生ずるに至るものである。其中の一本が偶然の事情によつて流布本となると、それが自然に權威を有するやうになつてしまふ。然し流布本になるとならぬとは、其本が原本であるからといふのでも無く、又佳本であるからといふのでも無く、全く其本の性質上からのためでは無くて、社會事情の上から大に行はるゝのであるから、幸にして流布本が原本であり佳本であつた場合は宜しいが、さも無い場合には遺憾なことである。そこで志の篤い讀者が異本を得て參考校勘の事に從ひたくなるのは必至の勢であり、そして又參考校勘によつて僞誤を正し疑惑を闢き難義を解くを得るに至ることも之有ることである。古書は此の理由によつて參考本校勘本の得られる場合には、普通流布本よりは參考本校勘本を得て讀むのが利益であることは、誰しも知つて居ることである。伊勢物語は吾邦の古文學の中でも優秀のものである。が、中々古いだけに幾多の異本がある。で、單に流布本を信じて讀むよりは、參考本によつて讀む方が何ほど宜しいか知れぬ。むかし水戸では保元物語や平治物語等に皆參考本を出してゐるが、今岩波文庫中に伊勢物語を收むるに當つて參考本を採つたことは甚だ喜ばしい。參考本を讀むによつて得

るところの利の實例は本書の序文等にも記されて明らかである。古書の異本多きものは實に參考本によつて讀むべきである。

昭和三年春日

露伴學人識

參考伊勢物語　上卷

る女を（御本このくになるをんを）よはひけりちゝはこと人にあはせんといひけるを（御本けるに家本けり）はゝなんあてなる人にこゝろつけたりけるちゝはなを人にて（御本なゝ人にて）ばゝなん藤はらなりけるさてなんあてなる人にとおもひけるこのむこかねによみてをこせたりけるさとは家本すむところなんナシ（御本家本をこせたる名本やりけるトアリ）すむ所なん（御本すむ二行さしのくにトアリ）いるまの郡（御本時本家本名本此上）みよしの（御本けるに二字ナシ）

みよしのゝたのむかりもひたふるに君かかたにそよるとなくなる

むこかねかへし（御本むこかねかへし）

わかかたによるとなくなるみよしのゝたのむのかりをいつかわすれん

となん（御本此三字ナシ）人のくにゝてもなをかゝることなむ（名本人のくにゝてもなをかゝることなむり相本なをナシ）やまさりける（御本たらすそ有けるトアリ）

十一むかしおとこ（御本有けりトアリ）あつまへゆきけるにともたちともに（御本ともに二字ナシ家本ともたちとともに十字ナシ）みちよりいひ（御本二字ナシ）をこせける（家本みちよりともたちのもとへいひをこせたりける名本をこせたりけるナシ）

わするなよほとは雲ゐになりぬとも空ゆく月のめくりあふまて

十二むかしおとこ有けり人のむすめを（御本女をトアリ）ぬすみてむさしの（御本むさしのくにへ）ゆくほとにぬす人なりけれはくにのかみにからめられにけり（御本くにのつかさからめけれは）女をはくさむらの中に（名本此間かくしトアリ）をきてにけにけりみちくる人（御本名本みちゆく人）この野はぬす人あなりとて（御本ぬす人あり）ひつけんとす（御本火をつけんとするに名本火つけんとすれは）

むさしのはけふはなやきそわかくさのつまもこもれり我もこもれり

とよみけるを（家本名本とよめるを）きゝて女をは（御本この女をは）とりてともにゐていにけり（御本ともにゆきにけり）

十三昔むさしなるおとこ京なる女のもとにきこゆれはは（御本は）きこえねは（御本家本くねは）くるしとかきてうはかきにむさしあふみとかきて（御本むさしあふみとのみかきて）をこせて（御本をこせてナシ名本やりてトアリ）のちをともせすなりにけれは京より女

上

むさしあふみさすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし（御本時本名本三句おもふには名本サスカニカケテ然雖而トカケリ）

とあるをみてなん（御本をんなトアリ）たへかたきこゝちしける（御本けり）

巻

十四むかしおとこ（名本有けり）みちのくにゝ（名本みちのくにゝにて）すゝろに行いたりにけり（御本名本行文字ナシ家本すゝろにいたりて）そこなる女京の人は（御本名本京の人をは）めつらかにやおほえけん（御本名本めつらやにかおもひけん家本おもひけん）せちにおもへるこゝろなん（御本けし）有ける（御本見えける）さてかの（御本かの二字ナシ）をんな

中〳〵にこひにしなすはくはこにそなるへかりけり玉のをはかりうたさへそひなひたりける（御本ひかめりける）さすかにあはれとやおもひけんいきてねにけり夜ふかく

いてに名本に文字ナシけれは女

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきになきてせなをやりつる

といへるに御本といひける家本といへおとこ京へなんまかる名本ゆくとて

くり原のあねはの松の人ならはみやこのつとにいさといはましを 御本名歌の掛りを文字ナシ 相本夫編本あねには松トアリ

といへりけれは家本けれはけよろこほひて御本ほ文字ナシいひをりける御本おもひけり二字ナシ

むかし御本家本相本おとこトアリ名本おとこ有けり みちのくにゝて御本みちのくにへいきありきける名本至三津嶋トカケリなてうことなき人のめに御本人のむすめにかよひけるにあやしう御本あやしくさやうにてあるへき女とも御本家本女には時本女にも名本女にても あらすみえけれは名本あらさりけれは

しのふ山しのひてかよふ道もかな人の心のおくもみるへく御本家本私語本みつへくトアリ

女かきりなくめてたしとおもへとさるさかなきえひすこゝろをみては御本文ひす所にて名本には文字ナシいかゝ

せんは御本いかゝせん此次おきめるてノ段ニツゝク十六

むかしきのありつねといふ人有けりみよのみかとにつかうまつりて御本つかへて時にあひけれと本あひたりけれとのちは御本のちには名本には三字ナシ世かはりときうつりにけれはよのつねの人のこともあらす御本上のつねときうしなへる人になりにけり名本よのつねのことといとあらす ひとからはこゝろうつくしく御本家本うつくしう あてはかなることをこのみて御本はか二字ナシ名本あてなることとをこのみて こと人にもにす御本此間ニよのわたらひ心もなく名本此間ニよのわたらひこゝろなく まつしくへても御本時本家本おつしくても名本まつしうても なををむかしよかりしときのこゝろなから御本ありわたりけるに よのつねのこともしらすとしころ家本とし四字ナシろ あひなれたるめ御本めも家本あり なれたるめやう〳〵とこはなれてつゐにあまになりてあれのさきたちてなりたる所へゆくを御本あねのさきたちてあまになりにけるかもとへゆく家本名本もとへゆくをおとこまことにむつましきこととこそなかりけれいまはと御本て文字アリゆくをいとあはれと御本は文字アリおもひけれとまつしけれはするわさもなかりけり家本おもひけれと以下ナシおもひわひてねんころにあひ御本あひ二字ナシかたらひけるともたちのもとに御本のもと三字ナシかう〳〵家本かく ニツクルいまはとてまかるを名本ゆくをなにこともいさゝかなること御本いさゝかのことも家本なにことと已下ナシいさゝかなることもトアリえせて御本を文字なしつかはすことくかきておくに

上巻

手をおりてあひみしことをかそふれはとをといひつゝよつはへにけり御本二ノ句へにけるとトアリよるのもの已下文ナシ

かのともたち是をみていとあはれとおもひてよるの物までをくりてよめる 御本この

年たにもとをとてよつはへにけるをいくたひ君をたのみきぬらん 御本上つをへにけるをトアリ結句たのみきつらん名本二ノ句カケリ

かくいひやりたりけれは御本やり二字ナシよろこひにそへて家本いひやりたれは名本かくいひてやりたりけれは

ほしといへる意なり（なか〳〵を字ら〳〵と訓せしは非蓋萬葉枕の落葉に既におり）

十四　きつにはめなてくたかけの

此はめなてといふ語きこえかたしとて眞名本爲食とかけるによりてはめなんとよむへしといふはいかならん塗籠御本に手の字爲家卿筆本にての字をかゝれたりそのほかあらゆる本にはめなことのみ有てはめなんと書しはあらす此歌もとみちのくの方言を集てよめる故に都になき詞なりしかしなから備中の人にきゝしにかの國には此類の詞有ゆかむといふへきをゆかてせんといふへきをせてといへるよしなりかれなてあまのあしたゆくくる又竹取物語にぬれたる衣たにぬきかへなてなむといへるなてとはをのつから別なるへし語意解しかたしといへともしゐていはゝはめなちふといふ語の約りしにも有へき歟さらは其義は將食といふことなれは眞名本にこの二字を書てはめなてと訓點有しなるへしさてきつにとは萬葉集にも狐にといふへきをきつにとよめることあれは誰も狐のことゝおもへとさにあらすみちのくにゝてきつといふは水槽のことなり竹ともしき所ゆへ家ことに槽を造りて水をたくはふるなりこの事南部津輕の人にたしかにきけりそれをきつとしもいふは木地櫃の中畧にてもあるへきにやくたかけとは栗本千夏か說にくたとは朽腐の義なり此歌ひなひてきつにはめなてなとよめるからに鷄を詈てくたれかけといひしなるへしといへりくたらかけ

の中畧といひ又家をくたといふ說なとも信しかたしもしくたらかけをくたかけとよむへくは誰もよむへきに此歌より外にみえされはさにはあらさるへしさて一首の意は鷄の寄なきせしを夜のあくるがとおもひて男のかへりし故にその寄なきを止めん爲に水槽にひたさんといへるなり鷄のむねを水にひやせは寄なきせすといふこともひたすことをはめるといふ詞も今現にあるならはしなり

廿二　あひみては

あひみては心ひとつをかはしまの水のなかれてたえしとそおもふこの歌初句きこえかたし塗籠御本にはあひはみてとありこれにてよくきこえたり然るに逢みてはと有かたまされりといふ人有いかならむ

四十九　ねよけ　ことをしそ

うらわかみねよけにみゆるわか草を人のむすはんことをしそおもふ六條宮御本と知歌抄とにむかし男いもうとのいとおかしけなる琴をしらふとてみをりてと有これにてねよけのことはことをしその詞よくきこえたり源語（あけまき）に在五か物語かきていもうとにきんをしへたる所の人のむすはんといひたるをみて云々包宮の歌に菅艸のねみむものとはおもはねとむすほゝれたるこゝちこそすれとありて下の詞にうらなくものをといひたるとみえしはすな

式に行酒三杯已後拍二後手一退出とみえたるそ正字なる退をさかるとよむ故にさかりての中畧なり男か女にをきさりにせられてせんかたなく我も退く意になりて天のさかてをうちたるなり下の文にむくつけきこと人のゝろひ事はおふものにやあらんおはぬものにやあらむといへるによりてさかてはのろひ事にうつものとおもへるは誤なり古事記に天の逆手を青柴垣に打成とは葦原中國を天神の御子にゆつり奉て二たひ此國に入ましき事青柴垣を結ひさへきりて入られさるかことくする意に天の逆手を打て退き給ひしといふ事なりと安齋先生はいはれしこのほか海士のさかてといひうしろのかたにて打といひ凶事には末ほとかすかに打といひ指先を下へをしたれてうつといひ掌を外になして手の甲をうち合するといひ物〳〵左と右との上下を逆にやりちかへて拍をいふかといへる說ともいつれも信かたしくはしきことは葦陽公子の考一册あり

もとたちて道なるともろこし人の言の葉はむへなるかな愚頼館のあるしの手かく事にあやしうたへなるは三世をつたへて宿世あるゆへ成へし今は又故人のこゝろをさくりしらては筆のをきてすまぬところあなりとてむさし野のひろく學ひ竹芝の浦のふかくたつねてやまともろこしの書をさへこゝらつとへ給へりそのはしめさかつきを浮ふるなかれの底なきにいたれるたくひとやいはむあるか中に此物語は名におはせたる下のこゝろなりとかいふめるひか事ともにや又は豆男のまめなるところより出けるにやさま〴〵にかきつたへつゝたかひめ多かるをあつめものしてすまあかしのうらやみなく唯ほとめにみわたさるゝやうに書なしみむ人の心のまゝに浪速のよしあしをさたむへくをきてられたるもしろき糸のそまん事をかなしみ道のちまたのかす〳〵にわかれたるなとをなけくたくひならすあまねき心のひろさなるへしこれを梓にのほせておなしこゝろの人々にみそなはせん此するのかたにふてそへよと宣へりされと溫故堂の主人なとひとしなみにあるへき事かはといなひ申さまほしけれとさしてきこえ給へるみこゝろさしをおもふにかゝるおもておこしの又有へきことならすとつゐに才のみしかきをもはちす知のたらさるをもかへりみす他のそしりをさへわすれてくた〳〵しきことをみたりかはしき筆の跡にとゝむる事とはなりけらし文化十四年二月袋翁

式に行酒三杯已後拍子後手に退出とみえたるそ正字なる退をさかるとよむ故にさかりての中
界なり男か女にをきさりこせられてせしかにより我ら[illegible]

文化十四年仲春刻成

製本所

堀川高辻上ル
京都書林　植村藤右衛門

心齋橋安藤寺町
大坂書林　秋田屋太右衛門

淺艸新寺町
江戸書林　和泉屋庄次郎

池端仲町
須原屋伊八

彫工　朝倉八右衛門

082
Iw.95
19

岩波文庫
210

昭和三年四月三十日印刷
昭和三年五月五日發行

參考伊勢物語 ★
定價二十錢

校訂者　屋代弘賢

發行者　岩波茂雄
東京市神田區南神保町十六番地

印刷者　菊地眞次郎
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目

株式會社秀英舍印刷

發行所　岩波書店
東京市神田區南神保町十六番地
電話九段二一〇九番
振替東京二六二四〇番